

大学における「生活科」の授業について

～実感的な理解を深める授業を目指して～

西 孝一郎

I. はじめに

近年、高等教育での教育課題から「アクティブ・ラーニング」が注目され、一方通行の講義が見直されている。この流れは、2017年の学習指導要領改訂につながり、「主体的・対話的で深い学び」という表現で、今後の授業の方向を示すものとなっている。

一方、生活科は、その創設のときから「体験的活動を通して自立への基礎を養う」という教科の特質を明らかにしている。このことは、「主体的・対話的で深い学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）」とのつながりが特に深いと言ってもいいだろう。したがって、大学における「生活科」及び「生活科指導法」の授業についても、生活科の特質に応じて、「体験を通して学ぶ」実践が見られるのは、自然なことであると考えられる。

相澤（2015）は、「初等教科教育法（生活）」における実践で、体験活動を通じた学びを大学において行い、「生活科授業の指導法を学ぶことを軸にしながらも、生活科授業の理念やカリキュラム構成を学び、さらには多様な授業実践や教材研究にも触れる」ということを目指している。1)

また、木村（2005）は、大学での「生活科指導法」の授業で、受講生の自己評価を分析し、受講生について力を明らかにしている。木村は、附属校と一般校での生活科授業の参観を取り入れており、受講生が生活科のあり方を理解するための大きな力となっている。2)

さらに、鈴木（2018）は、大学における「生活科教育法」の授業で、学校現場での自らの実践とつなぎながら、生活科の授業を受講生が体験できるようにし、そこから多くのことを学ぶように構成している。3)

このように、「体験を通して学ぶ」ということは、生活科の特質であるとともに、大学における「生活科指導法」「生活科教育法」などの特質にもなっている。

しかし、大学における「生活科」にかかわる授業で、学生がどのように学びを高めていくのか、というプロセスについては、まだ明らかにされていない。

そこで、本研究では、大学における「生活科」（本学においては教科に関する科目「生活」）の授業を通して、受講生がどのようなことを実感的に学び、子ども観、授業観などの「観」を身に付けていくのかを明らかにすることを目的とした。

II. 研究の方法

2017年前期の、教科に関する科目「生活」の授業は、本学こども教育学科で、主に小学校の教員を目指す「学校教育コース」の学生（2年15名）と、主に幼稚園教員・保育士を目指す「幼児教育コース」の学生（2年70名）が履修した。なお、この授業の前半は社会科を専門とする筆者が担当し、後半は理科を専門とする教員が担当した。したがって、7講義分の記録をもとにしている。

学校教育コースの学生にとっては、「生活」の授業をどのように「生活科指導法」の授業につなげていくのが課題になる。また、幼児教育コースの学生には、幼小連携という観点から「生活」の授業を受けてほしいと考えている。

本研究では、この「生活」の授業実践に対する学生のリフレクションペーパーを分析し、受講生がどのような教育観をもつに至ったのかを考察することにする。

本研究中に実線枠で示すものは、受講生のリフレクションペーパーから抜粋したものである。

III. 「生活」の授業

「生活」の授業では、生活科でよく行われる実践を、受講生が子どもの立場で体験できるようにした。その

上で、その授業が学習指導要領上でどこに位置付くのかを確認するようにした。

ここでは、単元全体を体験するのではなく、実践の一部を体験することにした。これは、学習指導要領の内容の幅広い範囲を体験するためである。

1. 名刺づくりをして、友達をつくろう 2017.4.11

授業のオリエンテーションをした後、すぐに名刺づくりを行った。小学校学習指導要領 生活科の「内容(1) 学校と生活」を取り上げた授業である。

小学校1年は、入学するとすぐに多くの友達と出会うことになる。同じ幼稚園、保育園から来ている児童もいるとは思いますが、大半は初めて出会う子どもたちである。そこで、自分なりの名刺をつくって友達と交換することにより、友達と話すきっかけをつくることを「ねらい」として、この授業が実施されることがある。

受講生は2年になっているが、交友範囲はそれほど広くなく、ごく限られた友人と過ごすことが多い。この状態は、大学でもよくあることだと考えている。

そこで、「名刺づくり」の意味を伝え、名刺交換をして名前を覚えることを「めあて」として提示した。受講生は、最初に3枚の名刺を作った。「子どもになって」と指示してあるので、名刺の内容は比較的簡単なものであるが、それぞれの個性が表れるものであった。

名刺交換では、「名前を知らない人と交換しよう」と指示して、「めあて」に迫れるようにした。受講生は、楽しみながら名刺交換をしていた。

その後、友達にもらった名刺をもとに、もう一度自分の名刺を作ることにした。生活科において、「繰り返して活動する」のが大切であることに気付いてほしかったからである。受講生は、1度目とは違った表現のしかたで名刺をつくっていた。

受講後の感想には、次のようなものがあった。

- ・名刺を作ってみて、一人一人それぞれ違って、その人の人柄や個性があふれていて、素敵な物ばかりだった。1年生のことを考えて作ってみると、全然違うものができておもしろかった。もっといろいろなことを、人の気持ちになってやりたいと思った。(幼児教育コース2年)
- ・今日の授業での名刺づくりは、入学してきたばかりの1年生にはぴったりのものだなと思いま

した。この授業があれば、自然と会話もできるし、子どもたちも安心じゃないかなと感じました。私が授業をするときは、今日のようにみんなの記憶に残ることをしたいと思いました。(学校教育コース2年)

このように、子どもの立場で授業を経験することにより、子どもにとってどのような活動がよいのかに気付くようになっていく。最初の授業ではあるが、生活科で最も大切な「子どもから始める」姿勢に気付くきっかけになったように考えられる。少しずつ「子ども観」が見え始めている。

また、小学校の教員を目指す受講生は、自分が授業者になったイメージと重ね合わせているのがわかる。子どもの立場と教員の立場を行き来しながら考えているのであろう。

「体験して学ぶ」のは、教員が講義だけでわからせようとするより、はるかに多くのことを学ぶのではないかと考えるようになった最初の授業である。

2. 学校を探検しよう 2017.4.18

大学を使って「学校探検」の授業を行った。小学校学習指導要領 生活科の「内容(1) 学校と生活」を取り上げた授業である。

小学校1年は、まだ学校の様子をよく知らない。「いろいろおもしろそうなところがあるな」と思っている子がいる一方で、自分の教室の範囲だけで留まっている子もいる。このような子どもたちに、学校を案内するのではなく、「学校探検をしよう」と呼びかけて、楽しみながら学校の様子や人の働きに気付いていく授業である。

受講生は2年なので、大学の様子はよく知っているはずである。しかし、授業で使う教室以外に行くことは少なく、本当の意味ではあまり知らない。また、知っているつもりでも、そこに置いてあるものには、あまり注意を向けていないことも多い。

そこで、「学校探検をしよう」の授業を行って、自分の気付いていなかった大学の姿にふれ、子どもの立場から授業をとらえる機会にしたいと考えた。その活動として、「校内オリエンタリング」を設定した。大学構内の主な場所をすべて回るようにし、そのうち5か所に問題を置き、それに答えれば一つの言葉「こ

ども好き」が浮かび上がるようにした。

「学校探検をしよう」の授業を終えての感想には、次のようなものがあった。

- ・今日はグループに分かれて学校探検をした。まず、グループ内の仲がよくなると思った。次に、シールやクイズを使うことで、子どもたちを楽しませることができるし、積極的に参加すると思った。ただ「学校探検をして楽しい！」だけでなく、学校のことを知ることができる。これからの生活に必要なことだから、こうやって工夫をすることで意欲を引き出さなければならぬと感じた。(幼児教育コース2年)
- ・私が小学生のときの学校探検は、みんなで活動しながら回る感じだったので、今回のように子どもだけで行かせるのはとてもいいなと思いました。子どもたちが楽しみながら、また友達との仲を深めながら学校探検をすることで、1年生の子たちが学校生活をより楽しめるようになります。私も、そんなふうにしていきたいと思いました。(学校教育コース2年)

このように、一人一人が活動するだけでなく、それがグループの人間関係をつくることにつながっているという考えをもつようになっている。これも「子ども観」の表れだと考えられる。

他の感想にもよく出てくるが、「楽しい」「楽しく」という言葉がキーワードになっている。楽しい活動をすることで、学校自体が楽しくなってくる。そこにも、生活科の意義を感じる

ここでも、幼児教育コースの受講生は、子どもの感覚を大切にしており、学校教育コースの受講生は、授業者としての自分を意識しているということがわかる。「子ども観」に加えて「授業観」が見え始めている。

3. 学校探検クイズをしよう 2017.4.25

「学校探検」の授業の続きにあたる活動として、「学校探検クイズ」を行った。小学校学習指導要領 生活科の「内容(4) 公共物や公共施設の利用」「(5) 季節の変化と生活」を取り上げた授業である。

小学校1年は、学校の様子を知ると、さまざまなおもしろさを見つけてくるようになる。教師に「こんな

のを見つけてきたよ!」「先生、〇〇って知ってる?」などと話しかけてくる。この興味・関心を「学校探検クイズ」という形にする授業である。

受講生は大人といわれる年齢になり、小さな変化やおもしろさに気付くことが少なくなっている。だからこそ、大学の中のおもしろいところに気付き、改めて「おもしろい!」「楽しい!」と感ずることができるようにしたいと考えた。

そこで、「校内オリエンテーリング」の活動を設定した。4~5人のグループで大学構内をまわり、「お気に入りのもの」を3つ写真に撮る。それを、隣のグループと交換し、相手のグループの写真が構内のどこを撮ったものか探しに行く、という活動である。

子どもを対象にした場合、デジカメ等で撮ったものを使うが、学生の活動では、通信アプリを使って3枚の写真を作りとりするようにした。それによって、プリントアウトなどの時間を使うことがなくなった。

「学校探検クイズ」の授業を終えての感想には、次のようなものがあった。

- ・今日の写真を撮って相手に送るのは、すごく楽しかったし、今まで見えなかったものがたくさん見られて新しい発見ができました。子どもたちもすごく盛り上がると思うし、知らない場所やものが新しくわかる機会になると思いました。これをするだけで、自然にも触れられるし、自分の生活になくはならないものに気付くことができました。また、子どもをほめるだけでなく、意味づけるのが大切だとわかりました。(幼児教育コース2年)
- ・この前にやった学校探検をつかって、自分たちで問題をつくるというのがおもしろいなと思いました。自然に子どもたちが主体的になれるし、問題にしたもの、問題にされたものは、強く印象に残り、学校の中にはどんなものがあるかが把握できるのではないかと思います。また、自然のものにもふれる機会になるし、コミュニケーションとしても上達していくのではないかなと思います。(学校教育コース2年)

このように、受講生は次第に、授業の中にある「ねらい」を意識するようになってくる。単に「遊び」だ

と感じていたものの中に、教師の「ねらい」を見つけられるようになる。ここに、「授業観」が生まれつつあると感じる。

また、子どもにどのように声をかけるのかということも考え始める。これは、授業のまとめをするときの指導者（筆者）の言葉が大きく影響する。指導者が受講生に対して、意識的に声をかけることが重要である。

4. 学校のカルタをつくろう 2017.5.2

自分たちの生活を振り返りながら、「学校のカルタを作ろう」の授業を行った。小学校学習指導要領 生活科の「内容(1) 学校と生活」を取り上げた授業である。

小学校1年あるいは2年で、学校の様子を振り返るという活動をする。これによって、子どもは空間軸に加えて時間軸で自分たちの生活を考えるようになる。

受講生は、大学に入って2年目になり、大学生活に慣れている状態である。しかし、改めて自分たちの生活や成長を振り返ることは少ない。また、友達と一緒に振り返るという機会となると、ほとんどないと言える。

そこで、「学校のカルタを作ろう」の活動を設定した。8～9人のグループ（通常のグループを2つ合わせたもの）で、読み札と絵札を作っていく。内容は、「1年生の子どもになって」あるいは、「自分たちの大学生活を振り返って」の、どちらでもいいことにした。どちらにしても、子どもの立場は実感できると考えたからである。

2グループでカルタが完成したら、集まってカルタ大会を開いた。受講生は、自分たちの大学生活を振り返りながら、楽しく盛り上がったカルタ大会にしていた。

「学校のカルタを作ろう」の授業を終えての感想には、次のようなものがあった。

・今日は、学校での生活や子どもに関してのカルタをグループで作りました。みんなで協力して、楽しくカルタを作ることができました。できあがったカードは、とても愛着がわいて、すてきな読み札、取り札になりました。どのような絵にするか考えるのが楽しかったし、それをみんなで取るのも、自分たちで作ったカルタのおかげで、いつもより楽しかったです。(幼児教育コース2年)

・カルタ作りを楽しみながら、子どもに関係ある言葉を探したり、絵をかいたりして、いい授業だった。また、みんなとカルタをすることでコミュニケーションがとれて、友達と仲良くなれたのもよかった。ただ、こりすぎて、作成の時間をあまり考えていなかったの、考えてやるべきだと思った。(学校教育コース2年)

このように、受講者は、みんなとやる喜びに気付き、自分たちの作ったものに対する愛着にも気付くようになってくる。授業が、他人事ではなく、自分事になっていく過程を味わっているように見える。

これは、「生活科観」の形成につながる授業になるのではないかと考えている。受講生は、それをまとめて、「いい授業だった」と表現しているのではないだろうか。

5. 季節を感じて 2017.5.9

自然にふれて季節を感じる活動は、生活科の中でも大切にされているが、その内容は後半の理科を専門にする教員に譲り、ここでは遊びを通して季節を感じることにする。そのために、昔の遊びを取り上げ、「もうすぐお正月」の授業を行った。小学校学習指導要領生活科の「内容(5) 季節の変化と生活」及び「内容(6) 自然や物を使った遊び」を取り上げた授業である。

小学生にとって、昔の遊びは経験したことがないものが多い。一方で、学童クラブなどでけん玉やコマ回しなどを経験している子もいる。この個人差もうまく生かしながら、季節感を味わう授業にしていくことになる。

受講生にとっても、昔の遊びはほとんどやったことがないものである。しかし、何人かは学童クラブなどで経験していて、今でもかなり上手にできるという受講生がいる。

そこで、「昔の遊び」の活動を設定し、みんなで楽しみながら季節を感じるようにしたいと考えた。全体を3つのグループに分け、けん玉、コマ回し、ダルマ落としの3つの遊びを順番に回っていくようにした。受講生には、子どもを想定した進級表を渡し、活動の励みになるようにした。

「季節を感じて もうすぐお正月」の授業を終えての感想には、次のようなものがあった。

- ・日本の文化について関心を持つことができたり、親戚や地域の人とも遊べるようになったりするのが、お正月の遊びの良い点だと思いました。お正月の歌を歌うことで、楽しさをさらに味わうことができると考えました。授業では、子どもたちにどんな遊びがあるのか聞いたり、どうやったらそれが上手くできるのかなどを友達に説明できるようにしたりしたいです。検定表があると、とても集中して活動に取り組むことができると思いました。今日の遊びは、どれも思った以上に体を動かすことができることに気付きました。(幼児教育コース2年)
- ・文化や季節を取り入れることは難しいと思っていましたが、今日やったように、みんなで実際に体験してみると、楽しく記憶に残るものになると思いました。また、ただやってみようだけでなく、検定表やゴールを目指すようにすると、やる気が出るので、何か目標を作ることが大切だと思いました。この授業を通して、実際に体験することは大切だと感じました。(学校教育コース2年)

このように、受講生は、授業の「ねらい」をはっきりと受け止めるようになってきている。さらに、自分なりの発展的な考えを入れるようになってきている。また、子どもたちに目標をもたせる大切さについても、共通して述べている。

これは、「子ども観」から発展して、「授業観」「生活科観」が組み合わさってきていることの表れではないかと考える。

6. 色の世界 2017.5.16

自然にふれて季節を感じる活動の2つ目に、色を通して季節を感じるような活動を設定することにした。そのために「いろのせかい」の授業を行った。小学校学習指導要領 生活科の「内容(5) 季節の変化と生活」を取り上げた授業である。

小学生にとって、自然はさまざまな色に包まれていて、不思議をたくさん感じるのではないかと考える。

しかし、いつのまにか、春に花に囲まれる様子、秋に色づく木々の様子を、あたりまえのように感じてしまっているのではないだろうか。また、「花は赤」「木は緑」などの固定観念に陥ってしまっている子どもも見られる。

受講生にとっても、これは同じで、季節の変化に伴う色の変化に対して、あまり注意を向けていないように見られる。また、子どもと同じで、「草は緑」と単純に考えている様子もうかがえる。

そこで、「色の世界」の活動を設定し、身の回りにあふれる色の豊かさを感じるようにしたいと考えた。今回も4~5人のグループでの活動とした。各グループに色見本を配り、校内の自然で見つけた植物がどの色になるのかを確かめていった。採集してよい草花についてはカードに貼りつけ、色の名前を書くようにした。

「色の世界」の授業を終えての感想には、次のようなものがあった。

- ・今日一番驚いたことは、色は3つの色(赤・黄・青)から成り立つのに、世界には億を超える色があるということです。私が見つけたもえぎ色とマスカット色は、同じ緑でも全然違う名前でした。本当に細かく色の名前が分かれているのだと感じたし、色も人間のようだと感じました。人間でいえば、一人ひとり違う。「みんな違って みんないい」という言葉があるように、どの色も個性的で素敵だと感じたし、子どもたちもいろいろな色を知ること、感情も豊かになると思いました。(幼児教育コース2年)
- ・今日、校庭の花や葉などの色を調べて、赤は赤でもたくさんの種類があることがわかった。絵を描くとき、葉っぱは黄緑や緑と、何も考えず固定観念でぬっていたが、今日の授業で、葉は葉でも種類によって濃さが全然違うし、その色一つ一つにちゃんと名前があることを知った。おもしろいなと思ったし、身近なところにこんなにたくさん色があったんだと再発見できた。(学校教育コース2年)

このように、受講生は、自分の固定観念を崩すような経験をしている。このことは、これから後のさまざま

まな授業、生活で生きてくるであろう。

また、幼児教育コースの受講生の感想には、それを「人間観」にまで高めていく姿が見られる。自然の姿の中に人間を見るというのは、「深い学び」だと考えられる。

Ⅳ. 「生活」の授業で身に付いた「教育観」

まとめとして、これまで行ってきた授業を、改めて学習指導要領と対応させる授業を行った。これまでも、授業ごとに学習指導要領との関連について触れてきてはいたが、授業の区切りがついたところで、全体を振り返るのが効果的であると考えたからである。

まず、これまでの活動が、学習指導要領 生活科のどの目標に対応しているのかを考えるようにした。ここでは、目標が一つに限らないことを確認した。

次に、これまでの活動を、学習指導要領 生活科の内容と対応させた。ここでも、一つの活動が一つの内容に対応しているわけではないことを確認した。

このようなまとめを行った後、前半をまとめたのレポートを提出するように指示した。以下に示すのは、その一部である。

【幼児教育コースの受講生】

- ・生活科の良さはそれだけではありません。教師が教えるだけでなく、自分たちで学んでいく授業は、グループ活動などを通して、協調性も身に付けてくれます。一人では発見できなかったことを、グループで情報交換し合えば、いろいろな人から得ることができます。学びはもっと広がる上に、新しい友だちができるという利点もあります。(幼児教育コース2年)
- ・生活の授業は、人との関わりや生活での気付きなども増えてくると思います。何事にも楽しさや興味をもつことは、とても大切なことだと思います。実際に自分たちが授業をする中で、子どもたちにたくさんの方に気付いてもらい、興味をもたせることが大切だと思います。(幼児教育コース2年)
- ・楽しみながら生活科の授業をすることで、子どもたちは、自然とこれらのことを身に付けてい

るのだと感じた。だから、指導者は、生活科の目標や内容から、どうしたら子どもたちが楽しみながら、活動を通して学んでくれるのか、工夫していくことも大切だと感じた。(幼児教育コース2年)

- ・この授業で、子どもたちは、自分自身と向き合い、自分たちが使っているものについて知ったり、普段から目にするものを改めて見たりすることで、物や自然を大切にし、考えを表現する力を身に付けることができるのではないかと思います。私も、この授業を通して、ただ生活しているだけでは考えないことや、知ることがなかっただろうということを知ることができました。(幼児教育コース2年)
- ・「生活科」は、子どもがどのように社会に関わっているのか、季節を感じられるのか、自分の役割は何なのかを知る大切な授業だと思った。町で歩いている人を助けてあげようと思うやさしい心が生まれ、季節の変化を身近に感じられる感性を育てていると思った。社会で生きるための力、知識をたくさん得られるような「生活科」は、重要な教科だったのだ、と感じた。(幼児教育コース2年)
- ・生活をより豊かにしたり、社会での生き方を学んだりするのが生活科の授業だと思います。楽しく体験しながら学ぶことで、自然や社会のことが好きになるだろうと感じました。(幼児教育コース2年)
- ・生活科は、自分はどんなことを知っているのか、また知らないのかを知り、自分のものへとしていく力をつけていくものだと思います。ですが、知るだけではいけないと思っています。そこから、人に教えたり、目が自然と向いたり、行動に移してみたり、意欲的に興味をもったりすることが良いと思います。少しでも子どもたちの心に残るように、楽しくすることが大切だと思います。(幼児教育コース2年)
- ・授業の中で活動した7つのことは、一つ一つは単純で簡単なことだけど、その中にはいろいろな内容、目的が詰まっていると思いました。「あまり話したことの無い人と話せるようになるう」など、到達点だけを子どもたちに言っても、ど

うしたらいいかわからないだろうから、目標を達成しやすくなる活動を考えて、その活動を通して自然に身に付けられるようにすることが、先生として大切なことなのかなと考えました。(幼児教育コース2年)

- ・このような生活の授業は、子どもたちが生きていく上で、本当に大切なものだと感じました。人間性をつくるとても良い活動で、人として成長できる授業だと感じました。(幼児教育コース2年)
- ・この7回の授業で、自然に触れ合うこと、身近な人との関わり、季節の変化などをやってきて、そういう関わりをすることで、豊かな感情、自分の成長につながりました。「生活科」の授業は、とても大切な時間だと思いました。(幼児教育コース2年)
- ・生活の授業で自分が小学校のときに行った活動は、本当に大切なことばかりで、大人になっても必要な要素が詰まっていたのだなと思いました。(幼児教育コース2年)
- ・実際に見たり、考えたり、体験したりすることによって、もっと知りたい、友達と協力して遊んだりする楽しさ、困っている人がいたら声をかけよう、など今までできなかったこと、知らなかったことを学べる機会ができました。(幼児教育コース2年)
- ・生活の授業を通して、地域や社会にふれ、自分自身の生活をふり返ったり、周りのたくさんの人々に支えられて自分が成長していることを実感できたりするのではないかと思います。生活の授業は、自分自身で体験し、自分ではない他人、友達や先生、地域の人々と関わり、楽しく、社会に少しずつ関わり、視野を広げていく授業だということがわかりました。(幼児教育コース2年)

【学校教育コースの受講生】

- ・生活科は、子どもに生きていく力を身に付けさせると思います。コミュニケーション力やいろいろな視点から物事を考える力、協力することの大切さなど、これから成長する子どもたちに

とって、生きていく力になるのではないかと思います。(学校教育コース2年)

- ・生活科では、自分を知る力がつくと思いました。子どもたちは、自分という存在を知り、たくさんの人々に支えられていきているのだとわかり、感謝する心や思いやりの心をもつのではないかと思います。「自分を知っているからこそ、他人の心も考えられる」生活の授業では、この力をつけられると実際に思ったし、将来子どもたちに教えたいと思いました。(学校教育コース2年)
- ・何かを協力して行ったり、考えを話し合ったりすることに、とても楽しさを見いだすことができ、グループ活動のおもしろさを改めて知ったし、一人で考えたり何かするより得るものもとても多いということを知ることができました。(学校教育コース2年)
- ・生活する上で必要なことを、直接的でなく間接的に子どもたちに学ばせることができると思います。自分たちの力で一つのことを成し遂げることによって、達成感も得られるし、教えるのではなく気づかせることによって一生忘れないと思いました。(学校教育コース2年)
- ・「生活科」の授業の中で、社会の一員であることを知り、その中で自分にどのようなことができるか、相手のことを思いやる力がつくと思いました。他にも、一つ一つのものには意味があって、その意味を理解し学ぶことで、きまりごとなども身に付いていくのではないかと思った。(学校教育コース2年)
- ・子どもたちが、私たち一人一人が支え合って生きていることを理解するためにも、とても大切な授業だと思いました。子どもたちが、実感し、理解し、行動に移す力をつけるために、私が教員になったときに「生活科」の授業を使っていきたい。(学校教育コース2年)
- ・「生活科」を子どもに教えるとき、自分も、実際にやってみたり見てみたりする活動を取り入れたいと思いました。そして、意欲的に興味をもつ力を身に付けてほしいと思いました。そのためには、自分がそういう人になれるようにしたいです。生活の授業で学んだことを忘れずに、生活していきます。(学校教育コース2年)

・生活は、他の教科と比べ、遊びながら学べることがメインになってきます。絵を描くのが得意な子や、外で活動するのが好きな子など、それぞれにスポットライトが当たることもあり、個性を生かすことができる教科だと感じました。
(学校教育コース2年)

これらの感想には、「子ども観」「授業観」「生活科観」だけでなく、自分の生き方、人としてのあり方などの「人間観」が多く見られる。「体験を通して学ぶ」という「生活」の授業は、このように「人間観」を揺さぶることにもつながるのがわかる。

これらの感想に、幼児教育コース、学校教育コースの大きな差は見られない。授業全体を見直したとき、受講生は保育者、教員という立場ではなく、一人の人間として受け止めるのではないかと考える。

VI. 終わりに

以上、本研究では、「子どもになって」生活科の授業を再体験することで、どのような「教育観」が育っていくのかについて検討した。その結果、個人差もあり、明確な順序性があるわけではないが、以下のような傾向を見つけることができた。

まず、受講生は「子ども観」を意識するようになる。自分が子どもだったらどう考えるのか、どう行動するのかと考えることで、「子ども観」が育っていく。これは、授業全体を通して感じられたことである。

次に、「授業観」を意識するようになる。授業者として気をつけていきたいこと、もっと工夫してみたいことなどを書くようになってくる。

さらに授業が進むと、改めて「生活科観」を問い直すようになってくる。最初に考えていた「生活科」と、自分たちが授業で体験した「生活科」を比べ、子どもだったころの体験を意味づけるようになってくる。

最後に、「子ども観」「授業観」「生活科観」を組み合わせながら、自分なりの「人間観」まで高めていく受講生の姿も見えるようになってくる。

本研究では、各時間独立した活動で授業を行い、そこでどのような「教育観」が育っていくのかを考察した。この授業を受けて、後期には一つの単元を「子どもになって」体験する授業を「生活科指導法」として

行っている。

今後は、全体をとらえる「生活」と、単元をとらえる「生活科指導法」で、どのように受講生のつかむ「教育観」が違ってくるのか、あるいは変わらないのかについて、研究を進めていきたいと考えている。

引用文献

- 1) 相澤亮太郎 (2015) 「甲南女子大学教職課程における生活科授業の実践」『甲南女子大学研究紀要 第51号』 pp.22
- 2) 木村吉彦 (2005) 「大学における生活科授業の在り方について - 実践力のある教員を養成するための「生活科指導法」の探究」『教員養成学研究 創刊号』 pp.47-48
- 3) 鈴木隆司 (2018) 『生活科教育法』一藝社、pp.2